

2020 年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名	井手 裕子	職名	助教	学位	修士(看護学) (大分大学 2006年)
----	-------	----	----	----	----------------------

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	慢性期看護学 看護教育

研究課題
成人慢性期看護学の教育活動に関して、学生が慢性期にある患者および家族の特徴とその看護を理解するために、学内での演習とそれに連動する臨地実習での指導の在り方について考察する。

担当授業科目
<ul style="list-style-type: none"> ・成人看護学演習(前期) ・成人慢性期看護学実習(後期) ・看護学(栄養学科・後期)

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【成人看護学演習】</p> <p><看護過程演習(遠隔授業)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全日程遠隔での実施となった。1 グループ 4 人編成で、2 人の教員で 6 グループを担当した。理解度を見極めるのはグループミーティング上やグループフォームを利用した自己評価シートであったが、学生の随時の表情などが把握できない分、記載されている事柄から更なる指導が必要な場合は、個別のメールや電話などでの指導を実施した。またグループワーク時はできるだけカメラを ON にすることを促した。事例は例年通り、慢性期事例(肝硬変)と急性期事例(胃癌)の 2 事例であり、事例ごとにもう一人の教員と担当を変えて、全グループ把握に努め、演習前後に教員間で個々の学生への指導等について調整を図った。 <p><技術演習(遠隔授業)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全日程遠隔での実施となった。 ・糖尿病食事療法の演習では、できるだけ実際の指導場面を想起させるために、日本糖尿病協会作成の CDEJ(日本糖尿病療養指導士)育成動画を視聴させ、グループ間でのディスカッションをさせた。講義では、食品モデルの写真などをスライドとして掲載し、1 単位の量が想像できるように工夫した。 ・血糖測定・インスリン自己注射の技術では、画面を通して教員が患者役、学生が看護師役でロールプレイを実施した。長期間の自己管理を余儀なくされる患者の特徴を理解させるため、頻回に自己採血をすることによりストレスを抱えるような発言をしたり、実際に刺入による出血の場面なども映像で見せたりと臨場感が湧くようにした。 ・術直後の演習では実際の実技が実施できなかったが、術直後の患者の状態の報告の場面では、術後侵襲による生体の変化を問いながら、根拠に基づいた報告になるよう指導した。 <p>授業科目名【成人慢性期看護学実習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度は臨地での実習がすべて中止になり、学内実習となった。しかしコロナ感染拡大状況による大学の BCP レベルによって、全日対面のグループ、対面と遠隔が混合のグループ、全日遠隔のグループなどが混在しており、それぞれのグループに応じて工夫をした。 ・実際の患者には接することが出来ないため、模擬患者を設定しその模擬患者を教員が演じることで実習を進めていった。できるだけ現実の患者を演じるようにつとめ、コミュニケーションの場面で学生が自分本位で会話を進める場合は、学生に対し不快な表情をみせるなど、患者に寄り添うことの重要性を伝えた。

- ・実際の病棟での患者の生活をイメージし易いように、個々の患者に応じたベッド周囲の生活物品の配置、医療器機の装着(静脈持続点滴や心電図モニターなど)、治療に係る装具の装着(圧迫骨折患者の腰部への軟性コルセット装着など)また、慢性疾患患者における家族支援の学習のために、他教員に依頼し患者家族を演じてもらった。全面遠隔のグループであっても、これらの映像はPCを2台設置し2方向からベッド周囲が見えるように工夫した。さらに、腹膜透析患者の自己管理指導の場面では、例年は実際の透析器具を臨地で見学させてもらうが、それが不可能であったため、医療機器メーカーへ相談したところ快諾してもらえ、入構手続きを経て来校していただき、透析器具を使用してのデモンストラレーションを実施し、患者の自己管理の困難さや支援の重要性を伝えた。
- ・実習記録については、遠隔の場合はGoogle Classroomを介しての指導を行い、Google Meetを利用して学生の顔を見ながら、または電話を利用するなど、出来るだけ直接指導をするように心がけた。
- ・慢性疾患患者の自己管理を支援するにあたり、多職種連携や継続看護、社会資源の活用といった学習も必要不可欠である。これらも臨地での体験が不可能であったため、本来実習に行くはずであった医療施設のホームページに掲載されている様々なサイトや動画などを紹介し、学生が自ら情報を得やすくなるような学習環境を工夫した。
- ・治療や検査の実際(化学療法の治療の実際や骨髄穿刺の実際など)についても、DVDや動画などを利用して臨地での体験にできるだけ近づけるように配慮した。

授業科目名【看護学(栄養学科・後期)】

- ・10月下旬に担当の1回分を実施した。この時期は一時的に対面授業が実施されている時期であった。担当内容は、「慢性疾患を持つ患者の看護 糖尿病患者の自己理解への援助」で、栄養学科の学生に看護者の視点から患者支援の内容について述べた。栄養学科の学生ということで、糖尿病の病態生理や症状、食事療法については既習であるため、薬物療法に視点を置き、実際にインスリン自己注射がどのように行われるかなどを学生達の前でデモンストラレーションを行った。単なる技術指導に限らず、慢性疾患患者に寄り添うという事、長期に渡る治療のために如何にしてその自己管理を支援していくかということに重点をおいて講義を行った。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等(任期)	加入時期
聖路加看護学会		1996年 4月
日本看護研究学会		1996年 6月
日本看護学教育学会		1998年 4月
日本看護診断学会		1998年 6月
日本糖尿病教育・看護学会		2003年 8月
日本看護科学学会		2008年 10月
日本慢性期看護学会		2017年 7月

2020年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究

研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(2) 個人研究

研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考

社会における活動等

団体・委員会等の名称 (内容)	役職名等	任期 期間等

学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

<3年生アドバイザー>

①個別面談の実施

新型コロナの影響で、例年4月から実施する面談がかなりずれ込み、7月からの開始となった。担当する25名学生の面談を遠隔で実施した。すでに7月になっており、前期の学習がすべて遠隔という異例の事態の中で、かなりの学生が心身ストレスをきたしていた為、グーグルミートを利用した面談では、学生の表情をよく見て、じっくりと話を聞くように努めた。特に一人暮らしをしている学生は、自粛生活を強いられる中、精神面の不安定さを招いていないかなどに留意して接していった。例年ならば後期からの実習への不安などの声もきかれるが、この時点で、今年度の臨地実習はほぼ中止ということが判明しており、学内実習への不安なども聞かれていた為、学内実習の内容が決定次第学生に細やかに伝えていくことなどに努めた。

②保護者会の企画・実施

新型コロナの影響で、ZOOMを利用したオンラインによる保護者会を11月中旬に実施した。異例の学習形態が進行する中で保護者も様々な不安を抱えていると推察し、コロナ禍における学習環境や実習状況、就職活動などについての説明を行った。就職活動に関しては、遠隔で業者および就職課にも参加してもらった。保護者の参加人数は全体の4分の1にすぎなかったが、事後のアンケート結果では、開催時期や開催方法およびプログラムの内容については9割前後の保護者が「適当であった」と回答しており、概ね有効であったと考える。

③学習支援（模擬試験実施を含む）

例年3年前期は各領域の演習が開始され課題の量も膨大なうえ、今年度はそれらがすべて遠隔授業となったため、基礎学力の定着度を把握する試験等の実施は、それらが落ち着く後期に入る直前、実習開始前の9月下旬に実施した。Webによる過年度の模試を実施したが、結果は比較的好成績であった。後期の学内各論実習が直後から開始される予定であったため、この試験結果に対する事後指導はとくに実施しなかった。

その後、年度末の3月に、2回目の模擬試験を実施した。こちらはこの時期に実施可能な模試（解剖生理

学・病態生理学) を、同じく Web を利用しての実施となった。この結果も全国平均を若干上回る成績であった。結果の判明が3月第3週目で学生も春季休暇中であるため、3年アドバイザーとしての事後指導はできなかったが、4年次の各総合実習の担当者に成績資料を共有し、今後の学習指導に活用してもらうこととした。

<国家試験対策委員>

新型コロナの影響で、年度初めの4月から9月まではすべて遠隔によるGoogle Classroomやkaname net を利用しての指導となった。模試は7月に第1回をWeb模試として実施した。学生にとっても初めての試みであり、事前に資料を配布し、Meet を利用して入念なオリエンテーションを実施した。

・模擬試験

新型コロナの影響で模擬試験の開始時期が例年よりかなり遅れ、7月に第1回のWebを利用した模試を実施した。その後9月から1月までの計5回の模試は感染拡大防止策を講じながらの対面での実施とした。対面での実施の意義は、国家試験当日、他受験生と共に長時間での受験を実施することへの適応力が身につけるためである。感染防止対策としては、登校時の検温、ソーシャルディスタンスを保つために実施講義室を2~3分割にし、マスクを外すことを避けるために昼食は挟まず午前中だけの実施とした。

・強化学習

毎回の模擬試験終了後に、低得点率の学生を対象として強化学習を実施した。7月の第1回の模試後は遠隔によったが、その後の模試は感染対策を講じながら対面での実施とした。ただし、国家試験を一か月後に控えた1月の強化学習は、個々の学生の健康面を重要視し遠隔による指導とした。

強化学習対象者の傾向として、学習時間の絶対的不足に加えて、基礎学力が定着していない、自己に適した学習方法が修得できていない、設問の読解力が乏しい、などが挙げられる。従って、集団の指導ではなく個々の学生の傾向に応じた対応が必要であり、回答の正誤のみに注目するのではなく、なぜその回答を選択したのか、その根拠について確認するようにした。またコロナ禍での学習であり、学習環境による精神的ストレスを抱える学生もおり、遠隔での指導時も、学習面だけでなく心身の健康面にも留意し言葉かけを行った。

・その他

例年ならば大学に入構し、空いている演習室や講義室を利用し、友人と一緒に学習できるはずが、今年度はコロナ禍のためそれができない状況であった。家庭の事情により、自宅での学習環境が整わない学生がいたが、大学のCOVID-19対策班に申し許可を得たうえで、個別に大学に入構させて学習環境を提供した。